

修理

約40日近くの夏休みを終え、8月30日に2学期の始業式を迎えました。長い2学期にどのような成長がみられるか、期待の感情に包まれました。

夏休みは2学期から生徒の皆さんが気持ちよく過ごせるよう、用務主事さんに各施設の整備や草刈りをしていただきましたが、先生方も修理などに力を注ぎました。

ある日、金属音?いや破壊音?が廊下にとどろき、あわてて音源と思われる教室に向かい、中を覗き込みむと、作業する先生方の背中越しに、黒い金属片や、大きな板が見えました。

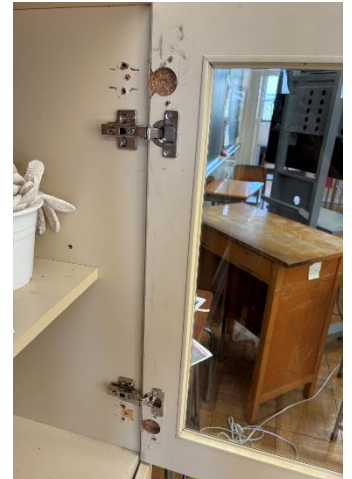
卓球台の修理のようです。小生が一教員として清瀬中に赴任した平成19年にはすでに存在していた卓球台ですから年季が入っています。木板を支える金属が経年変化で湾曲し、床に対して平行を保てない状況になっていました。分解して、その部分を叩いて戻そうとしましたが、これまた年季が入り、人力ではびくともしません。結局、木製の脚を作成し、その上に板を乗せる計画に変更しました。



3年生の教室では戸棚の扉の修理が行われました。かつて何かの大きな力が加わり、いつ壊れてもおか



しくない状況であったのですが、遂に、1学期に扉がはずれてしまいました。何度か修理をしたようで、蝶番を固定する箇所は崩れ、ネジで締めきれません。異なる形状の蝶番を購入して留めるのか、それとも、このまま回復できず、カーテン等で覆うのか悩むところです。そこで登場したのが本



校技術科 MK 工務店の棟梁です。蝶番の接合部が円形になっているため、それを受けするように扉の側を円形に削り込む必要があります。元の固定位置からずらして削り、(右上写真)蝶番を接合するという技を繰り返したのです。扉は見事に復活しました(右下写真)。この修理工程に生徒も参加しました。壊れてしまったら「修理する」使い捨ての時代に生徒は「大切な何か」を感じたはずです。修理とは新しい生命を宿すということですから。

8月29日の朝日新聞の記事を読んでいると「3500年前の『つばを割る』」の見出しがでてきました。考古学的にも貴重な資料であろうつばが割れたという報告に驚きました。イスラエルのハイファ大学に併設されたヘクト博物館に展示されていた約3500年前のつばを5歳の少年が誤って割ってしまったというのです。この博物館は「考古学の展示物を身近にする」方針で、貴重なつばは保護ケースなどに入らずに展示されていたのです。5歳の少年は、つばの中に何が入っているのかが気になり、強く引っ張ってしまったとそうで、その時、つばは倒れ、ばらばらになってしまいました。こうなってしまうと MK 工務店をもってしても修復できません。しかし、その「好奇心」を育てるため、博物館は、あらためて5歳の少年とその家族を、博物館の体験ツアーに招待すると明らかにしました。また、今後も展示方針は変えないとしていました。この配慮に5歳といえど「大切な何か」を感じたはずです。

つば終わるも、好奇心の芽、息吹き始める。

3500年の時は、これから始まる彼の新しい未来に生まれ変わります。

